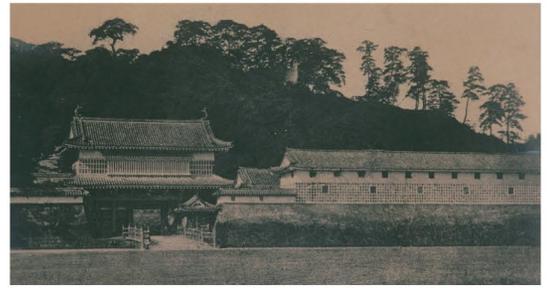


第3章 江戸時代の鹿児島（鶴丸）城の姿

◆江戸時代の鹿児島（鶴丸）城

江戸時代の鹿児島（鶴丸）城は、背後の山城（やまじろ 上之山城）と麓の居館からなり、「上山城」または「鹿児島城」（はんない 藩内では御内城）と呼ばれていました。江戸時代前半の絵図では、山城部分の曲輪を本丸、二丸（二之丸）とし、麓の居館は、居所（居宅）と記しています。

「鶴丸城」の呼称は、背後の城山の形が、鶴が舞っているように見え、鶴丸山と呼ばれたことにちなむと、江戸時代後期の『さんごくめいしやうずえ 三国名勝図会』には記されています。



明治初年の鶴丸城（鹿児島県立図書館蔵）



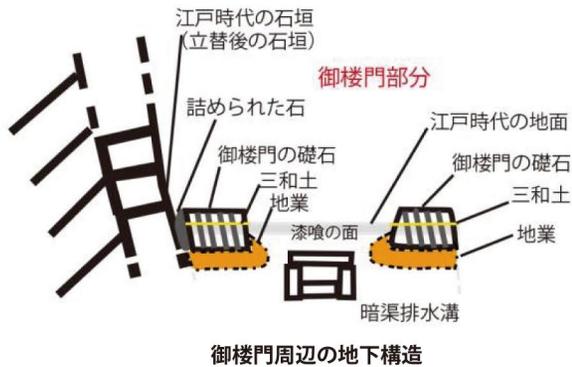
◆御楼門の礎石や地下構造

礎石は長方形のものと正方形のものがあり、平面形が最も大きいものは 100 cm × 122 cm あることがわかりました。

礎石の表面には、周囲を面取りしたと考えられる加工痕や錆の付着痕、西南戦争か太平洋戦争時の銃弾の痕跡が確認されました。

また、礎石の側面には、表面から 10 ~ 12cm 程度のところに三和土（漆喰）の痕跡が確認され、礎石の下には長さ 10cm 程度の割栗石を用いた地業が施されていました。

御楼門部の両側からは長さ約 14m、幅約 0.7m の溶結凝灰岩製の暗渠排水溝（地下に設置された溝）が発見されました。排水溝敷設後、御楼門床面部は三和土（漆喰）等で整地を行っていたことがわかりました。



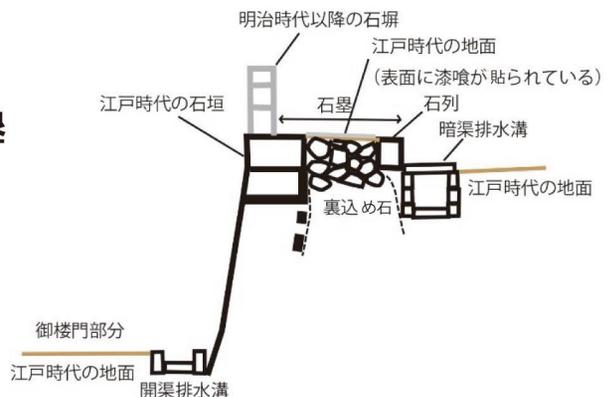
御楼門周辺の地下構造

◆御楼門周辺の排水溝や石垣、裏込め石、石塁等の背面構造

石垣背面を巡るように設置された石製排水溝がみつかりました。ここに城内の雨水や排水が流れ、御楼門部へと流され堀へ注ぐ構造となっていました。この排水機能は、石垣やその裏込めへの浸水を防ぎ、ほうかい 崩壊等の原因を避けるためと考えられます。

排水溝と石垣の間には、こぶし大から人頭大の裏込め石が通水の機能を持たせるために詰められていました。

排水溝の石垣側の側石には切石が複数段積み、石垣と合わせて石塁となっており、その表面には、雨水の浸入を防ぐための固い漆喰が貼られていました。



御楼門周辺の排水溝や石垣、裏込め石、石塁等の背面構造